楽しい（!?）ハロウィンパーティ☆

ａｎｇｅｌ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
楽しい（！？）ハロウィンパーティ☆

【Ｎコード】
Ｎ３５６８Ｆ

【作者名】
ａｎｇｅｌ

【あらすじ】
新一は、蘭と2人でハロウィンを過ごす予定だった。しかし、なぜか平次や和葉、快斗や青子までやってきて・・・ついには園子と真までもが！！

ｆｉｒｅ１；予想外！？

もうすぐハロウィンだ。
新一は行事が嫌いではないので楽しみにしていた。しかし次の瞬間新一は顔をしかめた。

「姉ちゃんか～。きたで～！」

「蘭ちゃん、明日楽しみやなぁ～」

いきなり平次と和葉はやってきた。この３人は新一を無視して話始めた。新一は今起こったことが理解できなかった。

「はぁ？？なんだ、服部？」

つい大声を出してしまった。服部はその質問に味気なく返事した。

「俺は今いそがしいんや！後で来る黒羽に聞いてくれ！！」

これにも驚いてしまった。しかし状況がわからない今、平次にはへたに言えない。

そんなことを考えて１０分ぐらいしたときに、快斗と青子がやってきた。さっきと同じようにやはり新一は無視された。
ただ、何を話しているかだけは聞くことにした。

「おめぇら、何企んでやがるんだ？」

新一は快斗に低い声で聞いた。するとあっけなく答えた。

「パーティすんだよ！」

まさかそんなことを言うとは思わなかった。
それを聞いた今の新一は憂鬱だった。

（今年こそ蘭と2人で過ごす予定だった。そこまではよかったんだ！！なのに、なんで服部たちが居るんだよ！！）

新一は苛立っていた。蘭だけではなく、服部、和葉、快斗、青子も含めた6人でパーティを開くのだ。新一はまだ来るかもと疑問を抱いた。

「園子は来ないのか？」

新一は聞いてみた。これには蘭が答えた。

「わかんないって！京極さんと一緒に居て、時間が余ったら来るっていってたわ」

新一はこのときほど園子をうらやましく感じることはなかった。

そしてその日について相談し始めた。

（しかも何で俺だけには内緒なんだよ！今知らされたって納得できるか！！）

そのとき蘭たち5人は同じことを考えていた。

（あの工藤新一が、赤っ恥をかくようなことをしないと！！）

そんなみんなの考えに気づかない新一。

新一以外のみんなはこの日をとても楽しみにしていた。

ｆｉｒｅ１；予想外！？（後書き）

ハロウィンについて書いてみました！

面白ければいいなと思います！

もしなんか問題でもあれば教えてください！

file2；たくらみ

その日から、ハロウィンの用意が始まった。近いし、大きいからという理由で、工藤邸を使うことになった。しかしこれは表向きの理由だった。

さかのぼること2週間前・・・

☆☆☆

「もしもし、和葉ちゃん？」

すぐに相手は出た。

「あーーー！！蘭ちゃんやん！どうしたん？」

いつもの明るい声で出た。蘭は続きを話した。

「あのことなんだけど・・・新一の家でしない？広いし、いろいろ仕掛けれそうだから。どう？」

「ええね！そうしよ！けど工藤君はいけるんかなぁ。あのことがあるからいわんのやろ？」

「だいじょうぶ。あっちがおれるわ」

蘭は不敵な笑みを漏らした。それは自信がある顔だった。

「うん、じゃぁ平次にも言っとくわ！トロピカルランドもいくんや

ったよね？」

「そうそう。こっちでは快斗君を・・・」

２人はこの話でしばらく盛り上がっていた。しかし蘭が疑問を抱いた。

「服部君はどうするの？なにもされないまま？」

次は和葉が不敵な笑みを漏らした。

「蘭ちゃん、平次は工藤君だましたあとしよ」

「わかった！！楽しみだね！」

再び盛り上がった。そして、電話して１時間が経ったころ、

「じゃ、蘭ちゃん、また」

「うん、またね！」

☆☆☆

こういったことがあったのだ。このときからすでにこの“裏”計画は始まっていた。

この計画のあるせいで新一、蘭でトロピカルランドを、残りの４人で、工藤邸の準備をすることになった。

ｆｉｌｅ２；たくらみ（後書き）

今回はじっくり考えて投稿しました！！！
・・・っといいたいところですが、もうすぐハロウィンなんで普段以上に下手に・・・・
けど、面白く書いた・・・つもりなんで！！

最近試合も終わって投稿早くなるぞ！！っとか思ってたら、１月に試合があるからまたもとのように・・・
投稿は出来るように頑張りたいと思います！

ｆｉｌｅ３；新一×蘭

２人はパンフレットを見ていた。
もう３０分は無言だ。
先に声をあげたのは新一だった。

「もう、やってらんねぇよ！！大体ハロウィンの俺の計画が台無しになったんだ！何で俺が、考えなくちゃなんねぇんだ！！」

「新一、真剣に考えてよ！！じゃなきゃ、こっちこそ予定が台無しよ！だいたいその用事って何なの？」

「それは・・・」

まさか、蘭と２人でいるなんて新一が言えるはずなかった。

「ほら、やっぱりいえないんでしょ！！たいした予定じゃないわよ、どうせ」

新一は言い返せない自分に腹が立った。
しかし、このことばかりはいえないと思って落ち着くことにした。

「じゃ、つづきやるわよ」

そういってまた作業に、没頭し始めた。
蘭は、これからだまされる新一に同情していたが、だます気のほうがかっていて、楽しそうだった。

２人にときどき平次たちから電話がかかってきたがずっと楽しそう

だった。

とうとう2時間ほどして、計画を立て終えた。新一はこれで解放されると喜んでいた。
しかし次の瞬間新一は気落ちした。

「じゃぁ、次は買い物に行くわよ！あっちは4人じゃ大変だろうしね」

らんはそういったが新一は

（あいつらむしろ楽しんでたんじゃねぇか？）

と思わずにはいられなかった。

2人はとりあえずデパートに行った。そこはほぼ何でもそろっていて便利だった。

まず新一は主に部屋の飾りを、蘭は例の用意に要るものをそれぞれ買いに行っていた。

つぎにハロウィン用の洋服を買いにいった。
新一は

（こんなもんが要るんのか？）

とずっと思っていたが、2人で楽しく居れたので満足だった。
蘭は、打って変わって、

（やっぱこれがないとね～）

と思っていた。

2人で洋服を見ていて、新一はこのまま時間が過ぎることを祈っていたが、幸せは長くは続かなかった。

「じゃ、帰ろうか、飾りつけもあるし」

この言葉が新一の気分をまた落としてしまった。

このときはまだ、新一は自分の家の状況を知る由もなかった。

ｆｉｌｅ３；新一×蘭（後書き）

急いで書きました（汗）
本当に急いで出したんで、チェックがあやふやです。
それでも読んでくだされば嬉しいです０（≧≦▽≦≧）０

ｆｉｌｅ４；平次×和葉&快斗×青子

一方、工藤邸では４人が楽しそうに話し合っていた。

「やっぱ、まずはハロウィンだし『Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ＴＲＥＡＴ？』って言わない？」

「じゃ、そこで蘭ちゃんがお迎えやね！」

快斗と和葉が続けて言った。

その流れに乗って青子と平次はいった。

「じゃ、そのあと工藤君を失神させる・・・と」

「そのあとどうするん？もって１０分や」

そこで快斗はいった。

「やっぱここはこの元怪盗にお任せを」

他の３人もこいつなら任せられると納得した。

そのあと話し合い計１１個もの仕掛けをつくることとなった。

それを考えている間和葉と青子は蘭に、平次と快斗は新一に電話したが、蘭は明るい、新一はキレ気味の返事が返ってきたと話した。

そのときに買い物の件について話しておいた。

「じゃ、あとは、工藤らが道具を買ってくるだけやな？元々買っといたもんだけやったら数がたりんし」

そして表面上の飾り付けが半ばに差し掛かったころ、新一と蘭がやってきた。

「和葉ちゃん、青子ちゃんこれ道具だよ～」

「こんだけにしたん？」

和葉が聞くと蘭は答えた。

「まだまだあるわ。新一こっち来て～」

すると新一が両手に大荷物を抱えてやってきた。
４人が同情してしまうほど重かったという。

「ほら。じゃぁ俺は自分の部屋に居るから」

「あかん！工藤君も手伝って！それに明日はもっとやらんとあかん事がいっぱいあるんや！」

和葉の熱弁のせいか、新一はおとなしく手伝う事となった。
しかし新一の役は“パシリ”に近く、その上わけの分からないことまでやらされて大変だった。

これだけで、すでに新一はハロウィンが嫌になる要因がふえることになった。

ｆｉｌｅ４；平次×和葉&快斗×青子（後書き）

本日３回目の投稿です！！
投稿が遅いので何歳だ？と思われるかもしれませんが、私はまだ１３歳です！
この調子だと身長が！（≧□≦）

つい私情が入ってしまいましたが、これの投稿は今日は終わりです！！
それではまた！！

ｆｉｌｅ５；４人の飾りつけ★

「さぁ、つくるか！！」

快斗がいった。もうすでに朝ごはんは取り終えていたので、つくるだけだった。

また昨日のように、新一は蘭と出かけていた。

「うん、やけど、気になるよねぇ」

和葉の言葉に先に平次が反応した。

「はぁ、何が気になるんや？」

「工藤君と蘭ちゃんや！今日は“偵察”って名が付いたデートやろ？」

そうなのだ。今日は新一と蘭は作ったどうりにいけるかどうかトロピカルランドでテストしていた。

終われば統計を元に計算することになっていた。

それを思い出して平次は笑った。

「そうやな。問題は工藤やな。どうでるんやろか」

青子も話に入ってきた。

「見た感じ、二人とも奥手みたいだもんねぇ。割と難しいと思うな」

その後もこの話で盛り上がる3人を見て、快斗はついにキレた。

「この量じゃ終わるかどうかも微妙なんだ！！ちゃんとやれよ！」

快斗の普段見ない姿を見てみんなおとなしくせっせと作り始めた。

料理系のワナは作れないので今日作るのは8個だった。残りのひとつのワナは特大なので蘭も来て作ることとなった。明日はちょうどサッカーの試合で新一は居ないので都合がよかった。

やっと半分作り終えたころ、青子がつぶやいた。

「そういえばみんなどうして誰も拒否しなかったんだろう。、これ楽しそうだけど高3だしもうすぐ受験あるよね」

「うん、それうちも気になっとった～」

和葉も同意した。しかし平次があっさり疑問を解決した。

「そりゃ、ここにいるやつはみんな頭ええからなぁ」

快斗も続けていった。

「それに俺らは出席日数は足りてる」

2人の話を聞いて分かったようだった。

「そうやね、だからかぁ」

「工藤君がどうにかなったくらいやしね！これくらいね～」

そういって話してるうちに今日の作業は終わった。
後は新一たちを待つだけだった。

ｆｉｌｅ６；２人きりの偵察☆

４人が、飾りつけと仕掛けを作っているとき、蘭たちはトロピカルランドに居た。
予定通り９時きっかりに入場した。

「さいしょは・・・お城か～」

「よし行こうぜ！！」

新一は昨日と打って変わって乗り気だった。
ここでうまくいけばデートのようになるかもと思っていたからだ。
しかしそんなことを考えているとき蘭は

（みんなのためにしっかりやっとかないとね！）

と考えていた。だから先が読めない偵察だった。

☆☆☆お城の中☆☆☆

「やっぱここっていいね！！」

蘭が新一のほうを向いて微笑みながら言った。
新一はそれだけで嬉しかった。話を続かせるために新一は聞いた。

「蘭は、どこに行きたかったんだ？あれにはいってるやつ以外で」

蘭は少し悩んでいた。しかしすぐに言った。

「噴水のとこかな？あそこは思い出の場所だしね」

「じゃぁ、これが終わったら連れてってやるよ」

「うん！！じゃ、終わったらね」

２人ともさっきより楽しくまわっていた。

☆☆☆１２時頃☆☆☆

もう前半に乗るものは終了していた。あとはジェットコースターや観覧車など５つほど乗ったら終了するてはずだった。今の時間に、昼食を食べることになっていた。

「こんないいお店があったなんて調べるまでわからなかったよね」

「あぁ、結構裏道沿いだしな、この場所は」

新一ははお城のとき以来ほとんど蘭に連れまわっされっぱなしで精神的にも疲れていた。

そこですいていて、中もきれいなここは、絶好の場所だった。

「おいしいよ！これ！」

「ほんとだな！」

そしてたわいもない会話をこのあと続けていた。

店を出た後は、さっきと同じように残り半分を回った。新一が耐えられたのは後に楽しみがあったからだということは

☆☆☆偵察終了後☆☆☆

「よし、そろそろかな」

2人は時計を見た。後5秒になっていた。
同時に二人はカウントし始めた。

「5！4！！3！！2！！1！！」

「0！！」

0の声と同時に噴水がわいてきた。

二人は声も出さずにずっと噴水を眺めていた。

そして噴水が終わると、思い出したかのように話し始めた。

「今日はこれが一番好かった！また来ようね！！」

蘭は今日一番の笑顔で言った。

「あぁ」

新一も答えた。
2人は満足して帰った。

ｆｉｌｅ６；２人きりの偵察☆（後書き）

やっと投稿しましたよ！新一＆蘭のデートは特に頑張りました！！

私は短編を作ろうとすると連載になってしまい・・・

やけに長かったと思います（汗）

でももう少しだけ付き合ってください！！

前夜祭は入れないんで！！明日は遠足だし（＾―＾）

入れるなら来年あたらしいの書こうと思ったらかな～

あさってが最終話です！

ｆｉｌｅ７；トロピカルランドの恐怖！？（前書き）

快斗はなぜかジェットコースターが嫌いな設定になっています。ご了承ください。

ｆｉｌｅ７；トロピカルランドの恐怖！？

とうとう待ちに待ったハロウィンがやってきた。なんといっても今年は特別だ。あの新一がドッキリにはめられ、平次と快斗も逆ドッキリにあわせるからだ。
間抜けな平次は全く逆ドッキリに気が付いてない。快斗はうすうすながら気が付いていたようだが・・・
そんな３人を蘭たちは内心哀れに思いながら、ハロウィンは始まった。

☆☆☆

「ってか、何でトロピカルランド集合なんだ！！俺んちからでも良かっただろ！！」

「みんなそれぞれ事情があるでしょ！わかんないの？」

新一と蘭の痴話喧嘩が始まった。それを見て集まったみんなは笑っていた。

「じゃ、蘭ちゃんたちが作ってくれた計画表を元に進むんやけど、工藤君の家にいかなあかんから、時間がきたらかえるで、それでいい？」

「うん、じゃぁ行こっ！」

この瞬間ハロウィンは口火を切った。

☆☆☆

予定していた計画も半分を過ぎ、目玉のアトラクションに乗ることになった。

「やっと、来たよ！」

青子が大声で言った。蘭も会話に乗ってきた。

「ここねー、待つ時間長かったのを無理言って早めに入れてもらえることになったのよ」

「蘭ちゃんすごーい！！」

和葉も加わり、3人が話で盛り上がったころ、快斗1人だけは青い顔をしていた。

「快斗どうしたんだ？」

心配して新一が聞いたところ、とても意外な答えが返ってきた。

「これって・・・俺が嫌いな・・・日本最速のジェットコースターじゃん！俺は乗らない！！」

それを見て、新一と平次はにやりと笑った。

「へーえ、怪盗キッドとも言われたお前がそんなもんが怖いとは・・・」

「快斗は一回ちゃんと安全レバーが下がりきってなくて、死に掛け

たことがあるもんねー」

「青子、それで俺を乗せようとしたんだな！！」

快斗は青い顔から一変、怒ったような顔になっていた。しかしまだ怖さは消えてなかったようだった。

「まぁ、快斗君、のろう？楽しいよ！！」

蘭に優しく言われて、断りきれず乗ることになった。

☆☆☆

「やっぱやめよーぜ。さっきは蘭ちゃんにいわれてつい言ったけど耐えらんねーよ」

快斗が順番までもう少しのときそう訴えた。

「ここまで来てそんなこというなよな、ちゃんと乗れよ！」

「そうやで、乗れんなんてなぁ、実は弱虫なんちゃうか？」

2人は言いたいほうだい言って、からかった。

結局流されてしまった快斗は乗ってしまった。

☆☆☆

「ギャー！！めっちゃ速ぇーよ！！死ぬー！！！！」

「おい、大げさじゃねぇか、アイツ」

史上最速とも言われたこのジェットコースターにも新一は負けてなかった。
平次も同様のようでやはり負けてなかった。
いっぽうそれぞれの隣に座ってる蘭と和葉は怖いといいながら新一と平次の手を握っていた。
平次は話に加わった。

「そやなぁ、ちょっと迷惑なんやちゃうか、他の客は」

「恐怖心が植えつけられてんだろーな。前の事件のとき、助けてくれたのは奇跡みたいなもんだな」

2人は話しながらも、キッドのときと快斗のときであそこまで怖がりようが違うことにびっくりしていた。
3分もの時を経て、やっと終わることが出来た。

「怖かった・・・もう一生のらねぇ・・・」

あそこまでダウンしている快斗を見るとかわいそうとしか思えなかった。
結局このあとは快とが足を引っ張って軽いものしか乗れなかった。
快斗以外はこれはこれで楽しかったようだった。
しかしみんなこのあとにも楽しみがあった。

ｆｉｌｅ７；トロピカルランドの恐怖！？（後書き）

このあと工藤邸編を書きます！
これの続きです！！見てください！
それでは！！

ｆｉｌｅ８；新一の危機！？

怖かったという快斗をなだめることを口実に蘭たちは先に帰って料理の最終仕上げをしていた。

３人はにぎやかに、しかし手際よく手を動かしていた。

蘭は入れながら言った。

「これぐらいでいいよねー」

「うん、これ以上入れると起きんかったら困るやん」

和葉はうなずきながら言った。青子も言った。

「あとは、おいしく見えればいいよね！」

そういってしゃべりながら、また、作りながら帰りを待っていた。

（ピンポーン！！）

ちょうど飽きてきたころに帰ってきた。２人は計画を始めた。

「ｔｒｅａｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔ？」

３人はかわいい買ったばかりの洋服を着て、出迎えた。

新一たちはしばらく見とれてしまった。

そのあと、３人が手に持っているケーキを差し出して言った。

「新一！ちょっと試食してくれる？」

そういって蘭はかぼちゃケーキを新一に差し出した。

「おっ、美味しそうじゃねーか！じゃ、食べるぜ」

新一は口に入れて美味しいと言った。しかし、しばらくしてとてつもない眠気に襲われ、その場に倒れこんでしまった。

「ケーキの中に入れて大丈夫だったね！」

青子は小さな声で話しかけた。蘭も和葉もうなずいた。

このあとは屋根裏に運ぶ手はずだったが、女子3人では落とす危険があるので男子2人にやってもらった。

このあと新一はとてつもない恐怖に襲われることになる。

☆☆☆

目覚めたのは、結局1時間ほど経ったころだった。新一は目を開けると見えている世界にびっくりした。

「おい、何で俺はこんなとこにいんだ？」

新一はそういいながらも自分が今どこにいるのか正確に把握できていなかった。

分かっているのは異常に暗くてたくさん荷物があることだけだった。

「おぃ、みんなどこにいんだ？」

呼びかけても分かるはずがない。誰も居ないのだから・・・

新一はすべてを“勘”に任せて前に進んでいった。
物の配置を変えてあったので、新一はいろいろなところをぶつけていた。
しかし、命の危険を感じた新一はそれどころではなかった。
やっと光が見えるところまで進んでいった。そこで、見覚えのあるものが見え、自分の家であることが分かった。

そこで気を抜いてしまいはしご階段を適当に降りていると、途中で両足が宙に浮いた。下を見ると、“階段がなくなっていた”事に気づいた。

しかしいくら新一の運動神経をもってしても、打撲もしていて、疲れている体では、上がれず、落下してしまった。

「いってぇ！！」

新一は叫んだ。しかしそれもつかの間下を見ると地面がかぼちゃの色に染まっていた。
体はかぼちゃまみれになってしまった。

その体でなんとかドアまでいったが、鍵が開かない。

「なんかないか？」

そうぶつぶつ言っていると図ったかのようにそこにまっさらなサッカーボールを発見した。
自分地を壊すのは少し気が引けたが、やむをえないと思ったのかそれをけって、ドアを開けた。ここでほっとするのはまだ早かった。

ｆｉｌｅ８；新一の危機！？　（後書き）

ｐａｒｔ２は後編です！！
長くなってしまってごめんなさい。

この話が終われば、他の話を再開いたします！！

ｆｉｌｅ９；新一の恐怖！？

ドアを開けた先、そこには黒い液体が流れていた。
この状況は通常ならありえない状況だった。それを考えられないほど、新一はパニックを起こしていた。

「なんだよ。次から次と！！あいつら捕まえて耐えられないほどの苦痛を味あわせてやる！！」

もはや、叫びに近かった。そのままっすぐ進むと、今まで見たことのないほど派手な飾り付けをした部屋を見つけた。もはやゴールだと思い切り入ると、きれいな洋服、靴（どちらかというと長靴だが・・・）、軍手があった。その隣には、地図も置いてあり、ここまで来いと書かれていた。内心腹立ちを覚えたが会わずには何も出来ないので進んで行った。

☆☆☆

長靴は逆効果のようでで、歩きにくく何度か躓いてしまった。

前を見ると階段になり、降りていると爆発音が足音から鳴った。
いくら新一でも怖かったようで飛んでしまい、これがあだで、こけてしまった。
しかしあのメンバーも命は大丈夫なように、布団が敷いておいた。
怪我はしなかったが、恐怖が植えつけられてしまった。

１階に行くと古典的なわなが仕掛けられてあった。それはうまくよけられた。

☆☆☆

そのころ・・・・

「あれ仕掛けたん平次やろ？」

和葉が睨み付けてきた。

「そうや。なんかあかんのか？」

何事もなかったかの顔で言ってきた。

それを見て蘭が、

「あれはダメだよ。引っかからないに決まってる」

「そうなんやー」

平次はそのことに驚きのようだった。

そのときだった。

青子が突然叫んだ。

「蘭ちゃん・・・後ろ！！」

後ろを見るとある人物が立っていた

「えっ・・園子じゃない！！京極さんも！！」

「来たわよ！私も参加するわ！」

「もちろん！」

園子はこういったことが得意なので来てくれて嬉しい、とみんな思っていた。

園子の登場で、この日の思い出に一味加わった。

☆☆☆

結局あのあと散々だった。変な匂いが漂ってきたり、まるで爆弾のような箱があってそれを解体したり・・・中身はびっくり箱だが、判断力がない今、解体してしまったのも無理はない。

とうとうトラップは2つとなった。最後は小説がおいてある部屋の前だった。

内容は簡単でトラップというよりは質問だった。

その声は変声機からを通して聞こえてきた。

『この場所は何が起こった場所ですか？』

新一はそれに

「コナンとして初めてあった場所だ」

と答えた。すると中にいたみんなが鍵を開けた。

「お帰り！楽しかった？」

と、5人ともいっぺんに言ってきた。園子は黙っていた。

「最悪だぜ！！死にそうだった！」

といった。そこで、園子が言った。

「でも、意外と良かったとこもあるんじゃないの？」

「まぁ・・・さいごは良かったな」

しみじみと新一が言った。園子がそれを見て、“良かったじゃない”と笑いながら言った。

そのあとは宴会だった。８人も居るとみんな楽しく出来たようだった。

快斗と新一に関しては、少しトーンダウンしていたが・・・

途中で平次が、

「結局最後の仕掛けは使わなかったんやな」

といった。女子４人は向かい合って笑っていた。

「そうだね」

と誰かが答えたが、その声は、少し隠し事があるような感じの口調だった。

平次は少し気になったが、そのまま宴会モードに入った。

この笑いの意味に気づかずに・・・

ｆｉｌｅ９；新一の恐怖！？（後書き）

間違って投稿する予定じゃないところでとうこうしてしまいました。

ごめんなさい！！すぐ訂正して出します！

平次編は明日になります！

ｆｉｌｅ１０；平次の１日遅れのハロウィン

ハロウィンの次の日、片づけが始まった。昨日宴会とか言って騒いだ分、また、絵の具の分が多かった。唯一の救いが、下にシートを敷いていたので、汚れが少なかったことだろう。

実は、この家を貸してもらうのには、このこともあったので、有紀子＆優作に新一とは別に電話したのだ。

☆☆☆

「もしもし、蘭です。お久しぶりです！！」

「あっらぁー、蘭ちゃんじゃない！！どうしたの？」

一息おいてからしゃべり始めた。

「ここ借りたいんですけど、だいぶ派手に使っちゃいそうなんです。かまいませんか？」

返事はすぐに返ってきた。

「いいわよー！しばらく帰ってこないしね！」

「ありがとうございます。じゃぁ、また」

☆☆☆

意外とすぐに終わったのは有紀子たちの性格の賜物だろう。
それに感謝しながら掃除をしていると、青子がこっちへ来てと合図してきた。
そこへ行くと早速話は始まった。

「蘭ちゃん、平次君のことだけどどうする？やるよね！」

「うん！じゃ、昨日のをアレンジしたのを出そうか！」

「そうだね」

その後、掃除が終わると、平次に近づいていった。

「平次！！ケーキ食べるで！！」

そのケーキを見せた。平次はそれを見てひとつ質問した。

「これ、昨日工藤に食べさせたケーキちゃうか？睡眠薬入ってないやろなぁ？」

「入ってへんよ！さっさと食べ！！」

有無を言わせぬ口調で言った。これには蘭も青子も入っていけなかった。
そのすぐあと平次はケーキを食べ眠ってしまった。
平次はこれまで見たこともないような目にあうことになる。

☆☆☆

打って変わってここは、2階にある小さな部屋だった。カーテンも締め切り、電気はろうそくといった夜のムードを漂わせる雰囲気になっていた。
そこから、一番といえるかもしれないドッキリをすることになる。

「へーいじ。起きーや！！」

その声で目は覚めたようだった。

「何をしとんじゃ！ボケ！！これから何する気や！！」

「あら、服部君、気づいてなかったのね。あなたは今から恐怖を味わってもらうわ」

蘭がいつになく恐ろしい口調で告げた。

「はぁ？？」

「もうすぐだよ。それまで待ってて！」

青子も言って、平次を止めていた。
しばらくそういう話をしていると、外に車が止まる音が聞こえた。

「とうとう、黒幕の登場や！！見ててみぃ」

和葉はそういうとむかえに行った。

とうとうその方は部屋の前まで来た。和葉は小さな声で話しているようだった。
そしてその方は扉を開けた。

「あんたはもしかして・・・親父!?」

平次はいきなりのことにびっくりした。しかしそんな暇はなかった。

「平次!!和葉ちゃんを毎回引きずりまわすな!!迷惑し取るやろ!!」

「それは和葉・・・」

ものを言う暇もないほど、威圧感があった。

しかし1番は、その頑固な姿勢だった。それで言い訳をするタイミングを逃した。

「いいわけすんな!!」

そういった調子で計2時間も行った。

「それでは、私は帰ります。息子が迷惑かけてすんません」

そういって帰っていった。

追求をやめない姿は凄かったが、これを見ていると犯人が逆にかわいそうに思えたとみんな言った。

今回は男子3人は深い傷を残すハロウィンだった。

ｆｉｌｅ１０；平次の１日遅れのハロウィン（後書き）

とうとう終了しました！短編しかも３０００字ぐらいの予定がこんなにも長くなってしまい驚くばかりです
（自分で驚くなよッ！）。

残りの小説は明日から書き始めたいと思います。
読んでくれたらいーなぁ・・・

出来たら感想・評価ください！悪いとことかも知って直したいですし（汗）

こんな駄作読んでいただきありがとうございました！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3568f/

楽しい（!?）ハロウィンパーティ☆

2010年10月8日21時25分発行